



加治佐哲也

兵庫教育大学学長

(かじさ・てつや) 1951年鹿児島県生まれ。広島大学大学院教育学研究科(博士課程後期)中途退学(九州大学博士)。広島大学助手等を経て、1997年、兵庫教育大学教授。2010年、兵庫教育大学学長。2016年に一旦退職の後、2019年より現職。中央教育審議会委員、教員養成部会長等を歴任。著書に『アメリカの学校指導者養成プログラム』(多賀出版)、『学校管理職養成スーパープログラム』(学事出版)等。

巻頭
インタビュー

これからの教員に 求められるもの

コロナ禍での厳しい状況

——新型コロナウイルス感染症の影響で、先生方も対応に追われています。

加治佐 とにかく忙しくなっていることは間違いありません。折しも、働き方改革の話も進んでいましたが、なかなか厳しい状況です。特に子どもたちの遅れた学習を取り戻すための補習や教育課程の組み直し、校内の消毒、子どもの心のケア等、コロナによって新たな対応を迫られていて、本当に大変な状況です。

ただ、今は少しずつ消毒作業のためのボランティアなど保護者の協力も得られるようになってきています。感染対策は十分に講じながら、今こそ、改めて外部とどう連携するかを考え、学校内外の力を合わせて

乗り切っていたきたいと思います。

そして、今回のことは学校だけではなく、日本中、あるいは世界中、どの職業でも本当に大変な状況だということは忘れてはならないと思います。

——学習保障の問題は難しい課題です。

加治佐 学年間で多少、持ち越しがあってもよいこととなりましたが、最終学年はそうはいきません。そうなるとやはり大切なのはカリキュラム・マネジメントです。この危機において、改めてここが問われています。普段からカリマネを意識しているところは、苦労しながらもなんとか対応していると思います。ポイントは、どれだけ時間をかけるかではなく、学ばせる内容をいかに効率よく配置して学習効果を上げるかという点にあるでしょう。

この点は、最近、中央教育審議会等でも話題になっていますが、履修主義と修得主義の話にもなっています。先生たちの中には単に時間数をこなすのではなく、何を学んだかに重点を置くべきだという考えも出てきていると思います。

そして、オンライン教育への対応も求められています。いろいろな考え方はありますが、たとえコロナ禍が終息したとしても、「元に戻る」ことはないのだろうと見ています。逆に、そう見なければ今後は対応できないでしょう。そう考えたときに今後必須となるものの一つが、ICTやオンラインの活用だと思っています。

教員養成・研修等のこれから

——先生は今、中教審・教員養成部会の部長も務めておられます。

加治佐 7月には「審議まとめ」を発表したところです。教職課程の改善を軸に、養成・採用・免許・研修、それぞれの段階での具体的な提案を行っています。

中でも注目は、義務教育9年間を見通した指導や小学校高学年の教科担任制の促進のために、中学校の両免許を併有させるという方向です。兵庫教育大学では先行して、小中学校の免許取得を卒業要件に入れています。他の大学・学部でもこうした動きになっていくと思います。また、現職の先生たちも小中両免許を取得しやすくなる措置が講じられます。

——今後はこういった方向で議論が進んでいくのでしょうか。

加治佐 これからのことですので確定的なことは申せませんが、個人的には三つの検討課題があると思っています。

一つは、教員免許状の更新講習を、他の研修との関係の中で抜本的に見直すという点です。更新講習については、これまでも、負担が重い、他の研修との重複があるなどの指摘がありました。特にこのコロナ禍では夏休みが短くなり、負担感が増大していますし、そもそも対面では実施ができないなどの問題も発生しています。これまでの

成果検証も含め、議論が必要です。

二つ目は、教職の魅力をどう打ち出していくかです。最近はいわゆるブラックな側面が強調され、その影響もあって、教職が敬遠されている雰囲気もあります。実際に勤務実態が厳しいということはあるのです。ただ、このコロナ禍のことがあって、民間企業などへの就職や勤務環境が変わってきて、教職を希望する学生と転職希望者は増えるかもしれません。

今後はICTを活用した学びをつくる力が教師に必須となりますので、いかに優秀な人材を学校へ集められるかがカギになってきます。優秀な人材を教職に引き込むためには、教職は創造的な仕事であることを強くアピールする必要があると思います。併せて、働き方改革を進めて労働環境を改善する必要があります。たとえば、今は無理ですが、平常に戻れば8月全部を休日にするような、目に見える大胆な策を打ち出すべきと考えます。

三つ目に、Society 5.0における新しい学

校教育の指導方法・内容への対応です。教

員養成関係では、教員養成フラッグシップ大学が今年度、募集・指定されることになっていました。フラッグシップ大学がEdU-echやSTEM教育などを取り込んだ新しいカリキュラムをつくって、先導的な教員養成を試行する。そして、ここでの成果から新たな教職課程の基準をつくり、他の大学も運用していく。このようなことがコロナ禍前に予定されていました。

フラッグシップ大学が予定通り行われるのかわかりませんが、コロナ禍によるオンライン教育の緊急性の高まりと一人一台端末の実現により、すべての教師にICT活用指導力を急いで育成しなければならなくなりました。ごく少数のフラッグシップ大学で先進的取り組みを行って、それから全教職課程で実施というのでは間に合わないかもしれません。

教員養成課程のカリキュラムはすでに満杯状態ですので、新しい内容を取り入れるとなると、根本的な見直しとなるので大き

な決断と作業を要することになります。

履修と修得のベストミックス？

——初等中等教育特別部会の議論も注目を集めています。ここでは部会長代理をお務めです。

加治佐 新型コロナの件でやや遅れていますが、各部会・作業部会等で議論を重ね、年度内には答申にまでこぎ着ける予定となっています。

8月20日の会合では答申の骨子案が話し合われました。注目されているのはICTを活用した学びづくりや小学校5、6年生での教科担任制導入などです。

少し気になる点は、履修主義と修得主義との関係についてです。骨子案では「履修主義と修得主義のベストミックス」というような言い方をしていますが、今ひとつはつきりしません。

現状は義務教育では履修主義が強いのですが、骨子案では児童生徒一人一人の特性

に応じた最適な学びを促進するといっています。個別最適化は、先に進む子や遅れる子どもに合わせる学びをつくるということであり、履修した時間で進級や卒業を認めることとはマッチしなくなります。

飛び級や原級留置を積極的に運用することと密接に関係しますので、しっかりと議論をして、具体的なあり方を示すべきだと思います。

高校改革のゆくえ

——「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」では高校改革が議論されています。

加治佐 議論されていることの一つは、スクールポリシーやスクールミッションの明確化ということです。これはこれが必要でしょうが、ここで思い出すのが、10年ほど前にやっていた学校における組織マネジメントの推進です。文科省を中心にその教材が開発されました。各学校のミッションを明確化し、いかにマネジメントしていく

か、その戦略を学ぼうと、学校でも研修で取り入れられていました。この効果の検証はどうか。これを学んだ管理職や教育委員会職員がたくさんいるはずですから、是非、その方たちを中心に進めてほしいところです。

二つ目は普通科改革として、学際的な学科や地域探究を目的とする学科等の導入です。おそらく、新しい学科ではSDGsやSTEAM教育が取り入れられていくこととなると思います。SGHやSSH校の経験なども生きてくるのではないかと。

三つ目はオンライン教育の拡充です。単に増やすことばかりでなく、オンラインでの学びの質の保証が重要です。今回のコロナ禍でも一部の通信制高校のオンライン授業がクローズアップされました。利便性と効率性が高い一方、カリキュラムや学習成果の評価による質保証の面、また対面の場合をいかに効果的に組み込んでゆくかなどは、もう少し議論が必要ではないでしょうか。

変化に対応するために

——今後の教員にはどういった力が求められるのでしょうか。

加治佐 今後、先生たちに一番必要な力は、ズバリ変化対応力です。例えば今回、小学校から大学まで、突然、オンラインで授業をしなければならなくなりました。数は少ないかもしれませんが、うまくいっている学校もあります。そうした学校は多くの先生が変化に対応した。それがまさに新しい力です。大学はほぼすべての講義がオンラインです。当然、得意な人もそうでない人もいますが、ともかく対応しなければ学生の学びの保証ができない状態です。

おそらくこの先も、大きな変化があるでしょう。例えばですが、この先、修得主義と課程主義が強くなって、本当に年齢が様々な生徒から構成される学級になったとします。そうすると年齢の高い子／低い子を一度に教えなければなりません。こうした子どもたちは個性も強いでしょう。こうし

たことに対応できなければなりません。あるいはこれも極端ですが、完全オンライン授業になって、生徒が通学しなくなったら、先生はどこで仕事をするのでしょうか。そもそも学校や教師の仕事の概念すら変わるかもしれません。

今は極端な例に映りますが、あり得ないことはありません。今までの常識が通用しなくなることも考えておかなければならぬ。実際にコロナ禍で分かったのはそういうことです。変化を正しく理解して前向きに対応し、新たな力を身につける必要があります。

——最後に先生方にメッセージをお願いします。

加治佐 先生方は「子どものため」とよく言いますが、今のこの危機的な状況でこそ子どものために頑張っていたきたい。特に今年度の卒業生たちについて、進学や就職においてハンディを負うことにならないように、なんとか力を付けて送り出してほしいです。踏ん張りどころです。